

京都文教大学人間学研究所＋京都文教大学学生課・指月アワー 共催
 「『ライフアーズ』を観る、『ライフアーズ』で語る」
 公開上映会＋シンポジウム

開催日：2005年1月11日（火） 会場：京都文教大学 同唱館

シンポジスト：坂上 香¹⁾

信田さよ子²⁾

森 達也³⁾

企画・司会：森 正美⁴⁾

司会・森正美：ただいまより京都文教大学人間学研究所および学生課・指月アワーの共催により「『ライフアーズ』を観る、『ライフアーズ』で語る」公開上映会およびシンポジウムを開催したいと思います。

開催に先立ちまして、まず本日のシンポジストとして東京からおいでいただきましたお二人をご紹介します。お一人目は、信田さよ子さんです。よろしく願いいたします。もうおひとりは、森達也さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは皆さん、待ち遠しいでしょうけれども、その前に少し、人間学研究所の所長の挨拶と、坂上監督からの作品説明をさせていただきます。まず、では人間学研究所・越智所長からご挨拶をさせていただきます。

越智浩二郎：こうやって真ん中に立たされるんですが、こういう有意義な会の頭に、主催者の研究所の所長だというだけで、のこの壇上に上がってきて型どおりの挨拶をするという、こういう悪い習慣はやめようと、所長の権限で言うんですが、やっぱり準備してくださった森先生や立石君なんかから、やっぱり型は必要ですからなんて言われると、しょうがなしにこんな

ところにいます。ですからなるべく型どおりに話はしたくないんですけども、どうしましょうか。

実は、この人間学研究所というのは変な研究所だなと思ってらるんですね。というのは、研究員が一人もいない。研究員のいない研究所というのは、他にありますか。所員というのはいらるんですね。各学科から選出された先生が、2名ずつで運営には関わっているんですが、研究をする研究員がいない、という珍しい研究所です。でも何もしてないかということそうではなくて、研究をしているのはこの京都文教大学の教職員全員なんですね。考えてみれば、文化人類学も現代社会学も臨床心理学も、全部何をやっているかということ、人間学なんですね。人間学研究をやっている。人間学研究所は、ですからそこで、そういう、やっている研究にその都度スポットライトを当てて、皆さんにもっとよく知っていただくようにする。あるいはそのスポットの明かりが点いてるなと思って、各学科から、普段はあまり交流のない学問同士が共同研究をするという、そういうきっかけを与える役目をしている。今日の会も、そのとおりの会なんですね。ただ、今日の「ライフアーズ」はこちらがスポットを当てるなんていうのはおこがましくて、もうすでに世界的な水準でスポットライトを浴びている。本当ならこういう上映会は、世界に認められる前にまず第一に、京都文教大学で上映会を行い、世界初演をやった

1) 京都文教大学 人間学部文化人類学科助教授
映像ジャーナリスト

2) 原宿カウンセリングセンター所長 臨床心理士

3) 映画監督／ドキュメンタリー作家

4) 京都文教大学 人間学部文化人類学科助教授

かったという。今ごろ思ってもこちらのあれが足りなかったということですが。今日上映して、また3人の先生方の色々なお話を聞いて、皆さんもそこに参加することで、またひとつ新しいスポットライトがこの『ライファーズ』に当たれば何よりだと思って、なんて話しているとだんだん型どおりにできるので、もうやめます。後はみんなで盛り上げましょう。終わります。

司会：どうもありがとうございました。では続きまして、監督およびプロデューサーの坂上香さんから、作品についての説明をお願いいたします。

坂上香（以下、坂上）：今日は皆さん集まってくださってありがとうございます。この800人の会場を使うといわれた時、作り手としては大きなスクリーンで、なるべくいい音で観てもらおうというのが一番なので、嬉しいと思ったのと同時に、誰も来なかったらどうしようと思って、不安になりました。やっぱり、けっこう席空いてますけど・・・それでも、人間学研究所の方々、あと私のゼミ生とか他の学生さんたちの協力もあって、たくさん来ていただけたので、上出来というか、本当にありがたいです。

私自身はこの大学に2年前にやって来ました。実は今日、しみじみと考えていたんですが、『ライファーズ』の撮影中に、この大学に来ることが決まったんですね。そして大学の仕事と並行しながら編集してきたのです。私にとっては、ライファーズの製作と大学生活が共に歩んできたという気持ちがあります。感慨深いです。

映画を観ていただく前に、監督として説明するというのは、ちょっと気恥ずかしいんですね。皆さんにはあまり先入観を持たずに、それぞれの見方で観ていただきたいな、というのが正直なところ。ただ、初めてこの映画のテーマと遭遇される皆さんの中には、ちょっと説明を聞いておいたほうが入りやすいところがあるかもしれないので、ごく簡単に、経緯につ

いて触れさせていただきます。

実は、4年前まで私はテレビのドキュメンタリー番組を制作する仕事をしていました。この映画に出てくる取材対象の「アミティ」というアメリカの犯罪者の更生施設とは、今から10年以上前に、テレビの取材で出会っています。もともとは、虐待というテーマで取材を始めました。幼児期に長期間さまざまな虐待を、身体だけではなく、精神的にも受け、しかも誰にも手を差し伸べてもらえず、自分もその虐待を受けたということに気が付かないで、そのまま大人になってしまうと一体どういうことが起こりうるのかという、そういうテーマで番組を作ったのです。

スイスの元精神分析医、アリス・ミラーという人から、アミティという所があるよ、と紹介されたのです。そこには薬物の問題を抱えている人、さまざまな暴力に走る人達がいるよ、と。しかも彼ら、彼女らの過去を見ていくと、さまざまな形で被害を受けていると。そういう視点でアミティに出会いました。私にとってはすごく衝撃でした。

テレビのたった1時間の番組枠の中、しかも虐待という視点で番組を作らなくてはいけないという、そういう枠の中では作りきれないものがあった。1回の取材で納得しきれなくて、もう1回取材に行ってみたんですね。それは取材に行くというよりは個人的な訪問で、自分でもう一度、自分の目で、カメラのない世界で見てみたいということで、何日かそこに滞在してみました。

それから何回か足を運ぶようになって、もう一度番組を作ってみようという気になった。最初の取材から3年たった1998年に、今度は「被害」と「加害」という二つのテーマをセットにして番組を作りました。私のゼミ生は見たと思うんですが、最初の虐待をテーマにしたものと、二番目の加害・被害をテーマにした番組を作った後で、もう一歩先に進みたい、と思うようになったんです。ですから、『ライファーズ』は、私にとっては最初の作品ではありません。アミティがらみの3作品目です。自主制作映

画としては最初なんです、テーマ的にはずーっとこの10年余りの間、引きずってきたもの、背負ってきたものです。

『ライフアーズ』の意味ですが、そもそも英語の“life”というのは「命」とか「人生」を意味しますよね。もうひとつはLife sentenceの省略で「終身刑」という意味があります。ですから、lifeにerがつくと、「人生を背負っていく人」や、終身刑受刑者という意味になります。

アメリカの刑務所には、とりわけカリフォルニアには、大勢の終身刑受刑者がいます。全米で13万人程度。カリフォルニアだけで3万人はいます。さきほど紹介したアミティという犯罪者の更生施設のプログラムにも、終身刑の人達が参加しています。重罪を犯した人達に焦点を当てて、今までテレビ番組だけではカバーすることのできなかった、もうひとつのアミティの側面を表現したい、伝えたいという思いで、この作品を作りました。

最初の2つの番組を作っていく中で、取材対象者が共通して口にする言葉があったんですね。

「私が、僕が、こうやって薬物をやめることができているのも、暴力を使わないでいられるのも、普通に社会で生活していけるのも、それはLifersのおかげなんだ」と。最初はその意味がよくわからなかったんです。その意味を私自身が知りたい、と強く思った。そしてこの数年間、Lifersと付き合ってきました。ただし、米国と日本では距離があるので、思う存分というわけにはいきませんでした。それでも何かにかこつけては、刑務所に出向いて行ったんです。特に用があるわけでもないんですけど、ジャーナリストとしての訪問許可をもらい、最近どうしてるっていう感じで他愛もない話をしてきました。そういう一見無駄に思えるかかわりあいのなかで、このLifersという人達が他の人達に与えている、何か光のようなもの、力のようなものを実感していったんです。そして、彼らの存在を日本の社会にも伝えたいなと、そういう思いがふつふつと湧いてきたんですね。

この映画は、皆さんが、それぞれの経験値、想像力、さまざまな意識、関心を持って、独自

に読み解いていただきたいんですが、ひとつ言えることは、日本社会とアメリカ社会には様々な違いもありますが、人間という意味においては共通しているということがたくさんあるという。命をどう、私たちは考えていくのかというのを、ぜひこの映画を通して皆さんに考えていただきたいなというふうに思います。

今日は東京からわざわざ信田さんと森さんに来ていただけてますので、いろいろ議論を深めていきたいと思います。後半ではぜひ、オーディエンスの皆さんにも質問を投げかけてもらったり、意見を言ってもらったりして、いい形で、ディスカッションができるといいなというふうに思っています。一方通行ではなくてね。じゃ、今から90分、長いですが、じっくり、それぞれ考えながら観てください。よろしくお願いします。

司会：それでは今から90分間、上映を始めたいと思います。

～映画『ライフアーズ』上映～

シンポジウム

司会：それでは時間になりましたので、3人のシンポジストを中心とするディスカッションに入りたいと思います。これ以降の進行は坂上先生にお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

坂上：では、それぞれのパネリストの方に、自己紹介も含めて、映画へのコメントをしていただこうと思います。まず森さんからお願いします。

森達也（以下、森）：はじめまして、森達也と申します。先ほど坂上さんが、以前テレビでお仕事を、ドキュメンタリーを作っていたという話をされました。僕の場合は1995年まで、テレビの仕事を、主にドキュメンタリーと報道です

ね、その辺を中心にやってみました。ところが1995年にオウム真理教の事件が起きて、翌年の1996年から、『A』という映画の撮影を始めます。当初はテレビドキュメンタリーにするつもりで始めたんですけど、撮影開始早々にテレビではこれはもう放送ができないというか、制作中止を命じられて、泣く泣く映画になってしまったという作品なんですけど。『A』発表後はテレビではもう仕事はできないかなと覚悟していたのですが、深夜のドキュメンタリーで細々と作りながら、同時に、ちょっと本も書いてみないかという話も出版社関係からあったりして。こう見えて子供3人いますから、生活をしなきゃいけないということで、映画は全然だめなんですね。食べません。特にドキュメンタリー映画なんてのは、こんなものは道楽でしかないわけで、仕方なく、仕方なくというか、本を書いてそれで多少の原稿料と印税で今生活しているという状況です。

ということで、オウムの映画を撮ったわけですけども、当然ながら加害と被害というかな、そういったものは僕の中でも大きなテーマでもありますし、映画だけじゃなくて、書くほうでもやっぱり、そういったことはずっと自分の中では大事なテーマですよ。基調低音のように響いてます。そういったこともあって今日この場に呼ばれたと思うんですけど。

そういうわけで毎日がとにかく気ぜわしくて、『ライファーズ』は今日初めて観ました。実は数日前に坂上さんからメールが来て、「もしかしたらさんざん罵倒されるかもしれませんが覚悟します」、みたいなことを書いてきたんです。ですからご期待に応えて、と言いたいとこなんですけど、・・・よかったです。ちょっと違うな。どう言えばいいのかな、とにかく、いいとか悪いとかの形容詞よりもまず、とても大事な作品だなと、しみじみ思いながら観させてもらいました。具体的な話はこの後に話しますが、本当に大事なテーマを、気負うことなくてらうことなく、しっかりと映像にしてもらった、作品にってもらったという思いで。本当に観てよかったなと、観てよかったなという気持ちで、今日実は、帰る予定で

いたんですけど、気持ちがあんまり高揚したんで、予定を無理矢理変更して今日は一泊しようかという気になるくらい、よかったです。どうもありがとうございます。

坂上：まあ、制作者泣かせな。じゃあ、具体的な話は後でいろいろお聞きするということで、信田さん、お願いします。

信田さよ子（以下、信田）：信田と申します。私は普段はカウンセラーとしてカウンセリングをやっているんですが、何でカウンセラーがこんなところにいることなんです。私のカウンセリングはもともとは、アルコールや薬物依存症が対象でした。さまざまな依存症、嗜癖とかAddiction（アディクション）というものは、司法と医療の境目みたいところを扱っているんですね。犯罪なのか病気なのかというところに、いつも引っかかっている。あとは、普通の人なのか、ちょっと変な人なのかわかんない、とかですね。絶えずマージナルというか、境界領域にいる人を、ずっと私は対象にして仕事をしてきました。この京都文教大学というのは、臨床心理学ではひとつの牙城という大学で、この大学には、綺羅星のごとくいろんな有名な先生がいらっしゃいます。そういうメインストリームとはちょっと私、違ったスタンスでカウンセリングをしているんですが。

私は今日で『ライファーズ』を3回目、観させていただきました。3回目だと、1回目2回目に見えなかったことが見えるんですね。それは何だったかという、全然記憶に残ってなかったのは、女の子が、クリスマスプレゼントもらってウィンクするところがあったでしょ、あれ全然覚えてなかったですね。それからやっぱり毎回印象に残るのは、レスポンスビリティの部分です。責任というのは応答する能力だということですね。そこが私は1回目からとても印象に残って、パンフレットの私の文章にもそのところが書いてありますが。

なぜ私の印象に残ったかということ、アルコール・薬物依存症から発展して、家族の中の暴力

が、私の今の大きなターゲットになっているからです。具体的に言うと、坂上さんが最初仰った虐待ですね。それから虐待の背後には必ず、両親の「夫婦間暴力」があります。でもこの表現はちょっと嫌なので、夫から妻への暴力といきましょう。これを「ドメスティック・バイオレンス」略してDVと言いますが、DVが私の今のメインターゲットということになります。当然そこには、加害・被害という関係が浮かび上がります。同じ家族の中に加害者と被害者が存在するという現実を目にして、私は一体、何をどういうふうに援助していったらいいのか、そして今までの心理臨床の理論というものが、果たして加害・被害にどのように有効なのかということを考えて仕事をしております。今日会場で販売していただいている『虐待という迷宮』（春秋社刊）は、同じアミティのシャナ・キャンベルさんが来日の折に、坂上さんが通訳をして、薬物依存症当事者のハルエさんと3人で鼎談をしたものです。その機会にもやっぱり同じことを感じました。加害者・被害者はどのように対立するのか、加害者は被害者ではなかったのかということを感じました。私は個人的に森さんのファンなので、こういうところでこういうふうに話できるのはすごく光栄なんです。こんなミーハー的なところで、一応、自己紹介を終わります。

坂上：森さんはオウム真理教という、この社会の誰もが知っているはずの、しかし同時に、もう忘れ去られてしまっているような問題と、ずっと向き合ってこられているわけですが、そういう取材のなかで、たとえば今日ご覧になった『ライファーズ』を観て、何かこう、引っかかるところとか、つながるところとか、逆に違うなと思ったこととか、ありますか。

森：今年の僕の目標が煙草をやめることなんです。もう5年ぐらい、何度禁煙を志しては挫折してと、繰り返してまして、結局今年も二日まで、二日間禁煙できたんですけど。あれですよ、年の初めって難しいですよ、禁煙。飲む

場合が多いんで、どうしても飲むと気が緩む場合があるし、あと、お酒と煙草ってやっぱり親和性が高いのかな。そういうことがあって、結局また吸い出してしまっていてという、つくづく意志が弱いというか、依存性が強いというか。

「何がオウムを唯一内側から撮った監督よ、煙草ぐらいやめられないの」と、家族からはしょっちゅう言われてるんですけど、全くそのとおりで（場内笑）、決して他人事ではないなという、そういった感じで観てましたけど。

加害と被害とオウム。オウム事件そのものは、もう10年前、昔話ですよ。今日ここにいる学生さんたちは、小学生か中学生、たぶんその程度です。どんな事件だったかもよくわからないような、たぶんそういったような、もうふたつみつっサイクルが回ってしまっている事件ではあるんですけども。ただやっぱり、改めて言いますが、あの時期、つまり10年前、とにかく日本社会はパニックでした。今の北朝鮮報道の比ではないですね。その意味では、あの集中ぶりというのは。朝から晩まで、とにかく、テレビが本当にオウムしかやらないような。本当にそういった時期が、1年近く続きましたよね。その結果やっぱり、日本の社会というのは大きく変わってきたというのが、僕の中には激しい実感としてあります。そもそも元からあったものが、何らかのたがが外れたとか、いろんな見方があると思うんですけど。

いずれにせよ、僕はやはり大きく変わったことは間違いないと思いますし、その変わったことのひとつが「厳罰主義」でしょうね。これは善悪二元論が強化されたとか、いろんな言い方ができますけれど、現象としては明らかに厳罰主義であり、当然ながら司法というシステムは大きく変わってきましたね。メディアがよく槍玉に上がりますけれど、司法も変わりましたよ、ものすごく。これはもう、たぶん10年前の判決やその主文などと今を比べてみれば、その違いというのは一目瞭然でわかります。とにかく、加害者＝悪で、悪というのは滅ぼさなきゃいけない、といった意識が、非常に強く蔓延してきたと思います。数年前『ヒーロー』という

タイトルのテレビドラマがありました。主演の検事役はキムタクです。昔は弁護士がヒーローだったけれど、今は検察がヒーローなんですね。

卑近な例で言いますけど、年末に起きた、奈良の女子誘拐殺害事件ですよ。容疑者が捕まって、確かにショッキングな事件ではありましたが、あっという間に世論が、これはメディアと言い換えてもいいんですけど、ただメディアというのは要するに民意の鏡像ですからね。僕はメディア＝民意だと思っていますけど。だからメディアと言ってもいいし、世論と言ってもいいと思うんですけど。彼が、要するに性的異常者、先ほど、マージナルなど、信田さんも仰いましたけれどね、そういった境界にいる人、かつてはマージナルだったはずなんですけど、もうマージナルっていうのは要するに境界、狭間ですよ。その概念がどんどん薄くなってしまって、どちらか片側、という意識が強くなってしまっている。たぶんその影響もあると思うんですけど、性的異常者というのは治らないと、更生しないんだ、と。そういった言説がもう既定なものであるかのように広まった。だから彼はもう更生しないと。前歴、前科、彼はもちろんありますよね。もちろんそういったことはありますけど、それがあたかもね、性的なそういったような偏向性を持つ人は、絶対これは治らないんだと。だからこそ、メーガン法であつたりとか、あるいはICチップを埋め込むとか、今そういった論議になってますけれど。短絡しています。まず治るか治らないかという論議はもちろんありますし、次にもし治りづらいのであれば、じゃあその刑務所の中でこういったようなシステムを考えるべきか、実施すべきかというような論議が次にくるのが普通だと思うんですけど、いきなりジャンプしてしまって、出所後にどうやって彼を監視するかとか、あるいはICチップを埋め込むとか、そっちに話がいつちゃってるわけですよ。最近なんていうのか、飛躍といいますか、そういった傾向が非常に強くて、普通だったら、え、ちょっと待ってと誰もが思うはずのこ

とが、誰も思わないままにどんどん進んでしまっている。

もう1個、最近の例で言ったら、ちょっと話ずれちゃいますけど、北朝鮮問題ですね。11月かな、藪中アジア太平洋局長がピョンヤンに行きました。その後に、例の、横田めぐみさんの骨が、実はDNA鑑定の結果違ったというあたりでまた大騒ぎになるわけですけど。あの報道について言えば、たぶん皆さんも目にしていると思うんですけども、報道の文脈ですね。「馬鹿にされた」とか「なめられた」とか、そんな文章もしくはコメントが実に流通してね、これは町場の喧嘩ですよ。少なくとも、その鑑定の結果については、ちょっと僕は疑問があるんだけどそれは今措いて、仮にじゃあ、北朝鮮が確信犯でその遺骨をごまかしたとしても、決してそれはなめてやったわけではないですよ。というのは、たぶん向こうは向こうで必死ですよ、どうやったらごまかせるんだろうとね。この、なめられたとか馬鹿にされたとか、こういったフレーズが流通することでどういうイメージが醸成されるかということ、おそらくはまあ、してやったりとほくそ笑む労働党や軍の幹部たち、もしくは金正日みたいね。そういったイメージが日本社会の中でどんどん定着して、で、許せないっていうことになっちゃうんでしょうけれど。単純に、なめたの、なめないとか、そういったような述語を使うべきじゃないし、メディアは最近、非常に暴走しがちになってるなあって感じを持ってるんですけど。

・・・今、何の話をしてたっけ、北朝鮮の話じゃなかったよね。その前の話が、何でしたっけ、奈良のあれですよ。

坂上：奈良の事件についてだったと思います。厳罰主義がはびこってきていると。

森：人に訊いてどうするんでしょうね、自分の言ってることを（笑）。だから、奈良の事件についてもそうなんだけどね、ジャンプしてしまって。そうだ、思い出した。

それで、言おうとしたことを思い出しました。藪中局長がね、僕はこの報道を聞いてびっくりしたんだけど、横田めぐみさんの夫といわれている人物と握手をしたと。握手をする時に、CIAから供与されたという特殊な試料を手のひらに塗って握手をして、DNAを採取してきたと。それをまあ、サンプリングとかなんかわからないけれど、そういった過程を経て、本人ではない、夫ではないと。これたぶん、公式では外務省言ってますけど、最近ではテレビでは普通にやっていますからね、まあたぶん外務省がリークしたことは間違いないでしょうし。僕、これ聞いて最初びっくりしたんだけど、皆さんびっくりしませんでした？ 外交の代表が、他国に行って、確かに現段階では国交はないですけど、一応他国です。他国に行って、そこの、向こうの人間と握手をした。握手というのはこれ、親愛を示すパフォーマンスですよ。握手をする時にこっそりDNAを持ち帰りましたと。外交の代表がですよ、日本の国の政府を代表する人間が。これ、とんでもないことですよ。こんなこと普通できないですよ。これは僕びっくりしたんだけど、まあ、ほとんどのメディア、カッコ民意ですよ、は、よくやったと。そういった論調でしたよね。というかほとんど、99.9%そうですね。僕以外いないですよ、今のところ、僕が知っている範囲では「おかしい」と言っている人は。で、佐藤優さんに電話で訊きました。外務省のラスプーチンです。幾らなんでも変じゃないかって。それに対して彼は、確かに外交というのはけっこう裏技を使うけれど、でもさすがにね、DNAのサンプリングはやりすぎであると同時に、普通こういった情報は出てこないと答えました。つまり、もし仮にやったとしてもね。これは要するに外交の、交渉の切り札にするわけですけど、それをすぐにリークしてしまうこの体質の変化に注目すべきだって。

この体質ですよ、問題は。つまりどうやったら国民に気に入ってもらえるかという部分で、外務省はどんどん走ってしまっていると。ポピュリズムです。これは非常に危険なことなん

だと、外務省の現役の人が言っていましたけれど、今僕が言ったことはメディアにも当てはまります。どうやったら国民に気に入ってもらえるか、つまりどうやったら視聴率が上がるのか、部数が伸びるのかというね。その構造の中でメディアはずっとやってきていて、オウム以降手法も変わって、外務省もこうなると、国中が言ってみれば民意の暴走に従属しながらどんどん突き進んでいく、といった状況になりつつあるなという気がするんですけど。その根底にあるのは何かというと、今日観た映画です。加害者への憎しみです。加害者というのは同時に被害者でもある、と。自分自身でもあるんだという、非常に単純なことが、いつの間にかどんどん消え去ってしまいました。たぶんその一番最初のきっかけになったのは、オウムです。

僕の映画を観た人は・・・『A2』ですよ、先日の上映は（編注：本シンポジウムの実施に先立って、1月6日に森達也監督作品『A2』の上映会が坂上香ゼミの主催で行われた）。映画の上映後にQ&Aをやりますと、だいたい必ず出る質問というのが、質問というか感想ですよ。オウムの信者があんなふうに、普通に笑ったり冗談を言ったりすることに、まずはびっくりしました、といった感想を言われるんですけど、それに対して僕はいつも言っているのは、それは当たり前なんです、と。そんなことはもう映画を観るまでもなく、普通だったらそれはみんな了解してるはずのことですよ。でもどっかでそれが止まっちゃうんですね。言い換えれば、オウムだけじゃないです。北朝鮮の工作員だって、アルカイダだって、バース党員だって、あるいはネオコンだって、みんな笑ったり冗談言ったり、失恋してやけ酒飲んだり、誰かを恨んだり、そういった日々を繰り返し、そういった感情を持ってるわけで、当たり前ですよ。でもその同じような感情を持っているというイメージが、どこかで何かの瞬間に止まっちゃうんですよ。止まったほうが楽です。加害者を絶対的な悪として彼岸に置き、憎めれば楽ですけど、でも憎むことで結局はこの世界がどんどん住みづらくなっ

ている、息苦しくなってきたことは間違いないわけですね。ちょっとまとまらなくなったので、ちょっとまた後で話していいですか。

信田：じゃあ私、ちょっといいですか。いま森さんが1995年って仰ったんで、今ずっと考えていたら、私が今日あるのはオウムのおかげだというのが、すごくまわりまわった縁としてあるんですね。それは何かというと、私はこの中でご存知の方もいらっしゃると思うのですが、斎藤学（さとる）という精神科医と一時期共同歩調をとって仕事をしていたんですが、彼がオウムの事件の後で、今の若者のさまざまな不安を吸収するのはオウムしかないというのは何たる現状だ、と言いました。それで彼は東京都の精神医学総合研究所をやめて、開業したんですよ、麻布にクリニックをね。それはオウムに吸収されないように、若者たちがもっと安心して居場所をつくらうという建前ですけどね、それをつくったんです。別名「麻布のサティアン」と呼ばれました。それが私が原宿カウンセリングセンターをつくる後押しになった。だからオウムがあったから、そうか、ということがひとつあります。

森さんが仰った、加害者＝悪というのが強くなったというのは、裏返しにすると、被害者は正義で、権力であるということが、いつそう1995年から出てきたのでしょうか。1996年に私はアダルトチルドレン（AC）に関する本「アダルト・チルドレン完全理解」（三五館）を初めて書きました。あれは要するに自分は親の被害者だという本なんですね。これがえらく受けたんですよ、当時の世の中に。自分はオウムに入ってたという人が、私の数えるだけで4人ぐらいカウンセリングにやってきました。そういう意味では、オウムに入った人、もしくは脱会した人たちと、ACという言葉に惹かれる人達が、かなり重なっているという現状がありました。

その中で何を考えたかということ、やっぱり日本が被害者権力の時代に入ったなというふうに直感的に思ったんですね。アメリカでPTSDという言葉が、ベトナム戦争後、アメリカ精神医学

会の診断基準（DSM）の中に加えられました（1980）。ベトナム帰還兵のさまざまな精神的問題救済のためにという政治的背景を伴って、PTSDという言葉が登場したんです。日本でその言葉がメディアに登場したのは、1995年の阪神・淡路大震災直後でした。PTSDという言葉が初めて、朝日新聞の一面に躍ったんですね。そのことを考えますと、やっぱり1995年というのは、森さんは社会的文脈で仰っておりますが、私たちのような臨床の立場の人間にとっても、非常に大きな分岐点だったというふうに思うんですね。それから何が始まったかということ、ACブーム、トラウマブームが始まり、多くの人達がACや虐待の被害者である、自分がサバイバーだというふうに言い出して、その流れから子どもの虐待防止法が2000年にでき、その余勢を駆って、2001年にDV防止法ができた。こういう流れを考えますと、1995年というのは、本当に今、森さんの話を聞いて思ったんですが、オウム、それから神戸の地震によって、なんかこう、日本の歴史のひとつの大きな転換点になった。それは司法の厳罰化と、その裏側に行けば、問題を心理学化するトラウマの隆盛というものにもなりますし。

私は森さんが仰ったように、マージナルな部分の、どちらとも言い難いものをどこまで大事にしていけるかということを考えています。今私のかかわっている仕事のひとつに、DV加害者更生プログラムがあります。DV防止法というのはどういう法律かといいますと、家族という非常にプライベートな空間の中で、夫が妻に暴言・暴力・無視・強制されたセックスなどを行使したときに、これをDVととらえる法律なんですよ。しかしDVを行使しても逮捕されない国は、東アジアの台湾・韓国・日本の内で、日本だけ。ヨーロッパも、当然坂上さんもお存知のアメリカもそうですが、全員逮捕です。日本では逮捕できない。だけれども一応、防止法はつくったという現状は評価すべきでしょう。大きな柱に被害者救済がありますが、いっぽう加害者も野放しにしておいてはいけないじゃないかということで、内閣府も地方自治体に試行的に

加害者更生プログラムやってくれませんかと打診したんです。結局、東京都と千葉県の2ヶ所で実施することになったんですね。もう1箇所は沖縄です。沖縄は、今年の4月からやらなきゃいけないことになってる。県議会で、ドメスティック・バイオレンスを防ぐために、我が県は何かをしなきゃいけないという提案をしたら、議会で通っちゃったんですよ。いわゆる加害者更生プログラムをやることになっちゃった。全国で3つの地方自治体がやらなきゃいけないことになっていて、内閣府がお金を出してるのが、千葉と東京。その東京のプログラムに、ファシリテーターとして昨年9月から参加しています。

細かいことは専門的な話なんで省略しますが、私が驚いたことがあるんですね。被害者支援をしている団体から反対が起こったんです。それはすごく単純明快な言い方ですね。たとえばシェルターをやっている人達は何を言うかという、そんなお金があったらシェルターつくってくれて言うんですよ。あんなどうしようもない男たちに、極悪非道な血も涙もない、女房を殺すような男に金出して更生プログラムをやるんなら、なんで被害者救済の施設を作ってくれないのか、というのが主張なんです。

一昨年カナダに行った時に実際のグループに参与視察する機会がありました。カナダでは、DV加害者更生プログラムは、最大の被害者支援だという言い方をしているんですね。これはPC（ポリティカリー・コレクト、政治的に正しい）的ですけどね。被害者支援の最大のものは、加害者になってもらうこと。これは当たり前のことですね。しかし現実には日本では、そのような反対がある。そして、ほとんど協力してもらえない。本当にこれは困ったことです。

つまり被害者支援と加害者更生プログラムが、あたかも敵対するような構造が起きちゃってる。私はそれを見たときにね、『ライフアーズ』を観てほしいと思ったんですよ。それは何かといたら、犯罪を犯した人、たとえばDVの加害者もそうですが、変わることができるということを、なぜ信じられないのか。私はなぜそ

れを信じられるのかというと、やっぱりアディクションをやったからです。薬物依存の当事者である方が今日も来てらっしゃいますが、本当にもう、どうしようもないヤク中のおにいちちゃんおねえちゃんたちが、薬やめて生きていけるということを見てきましたので、私はすごく信じているんですよ。奇しくも東京でプログラムに関わっている人間は、全員がアディクションにかかわってきた臨床家なんです。

ですから、そういうことを考えますと、今の森さんのお話は、ああそうか、非常にsocial（ソーシャル）な次元と、非常にpsychological（サイコロジカル）、personal（パーソナル）な次元でも、やっぱりオウムの事件というのは非常に大きな分岐点だったというふうに聞かせていただきました。

坂上：サリン事件が1995年だとすると、私はちょうどアミティの撮影をしていた頃。今聞いていて、何となく思い出したのですが、確かニューヨークのホテルで、ニュースが流れてきたんですね。地下鉄の駅あたりで、グッーと地下鉄職員の方が走ったり大騒ぎしていて、倒れている人も画面に映っていた。最初、音をつけてなかったんですよ。私は、音をつけなくてテレビを観たりすることがあって、その時もつけてなかったから、まさか自分の国のことだとは思ってなかった。韓国で、学生運動がまた起こってるのかなあって思ったんです。そしたら、爆破されたような場所が画面に映って、「あれっ、なんか日本語で地下鉄とか書いてあるぞ」と思って、音を上げたんですね。そうしたら、見覚えのある場所で、なんと東京の霞ヶ関。日本じゃないかって、びっくりして、食い入るように見たんですね。確かCNNだったと思うんですけど。

私の作品は、直接サリン事件とはつながってはいません。でも『ライフアーズ』のような作品を作っていくときに、自分が生きている土壤はどういうところなのかという視点は欠かせない。森さんのお作りになられた『A』や『A2』は何回も観ましたが、私の場合、撮影地は米

国であっても、『A』や『A2』に出てくるような日本の状況を念頭に置いて取材したり、編集したりしているんです。特にサリン事件以降の、国全体が思考停止してしまったような状況の日本に暮らす人たちに、自分の作品を観てもらっているということは、かなり意識して作っているつもりです。たとえば英語版と日本語版を作ったのですが、その内容は微妙に変えてあったりします。それから、日本語の翻訳は私自身がしましたが、翻訳の仕方にはかなり気を使いました。日本の人達に、加害・被害についてより広く考えてもらいたいのので、自分なりに様々な工夫をしたつもりです。

よく質問で、こんなことを聞かれます。アミティのプログラムは誰にでも効果があるわけじゃないですよね？登場するのは模範囚だけですよ？映画で駄目だったケースをなぜ出さないんですか、と。上映会ではかならず出てくる質問ですね。もちろんそういう描き方もなくはないと思うんですが、私が伝えたかったのは、人は変わりうるんだということ。この映画に登場する人達は、昔は本当にギャング団の頭(かしら)だったり、チンピラだったり、DV加害者だったり、いろいろな場面で暴力をふるう側だった。いわば「どうしようもない人達」で、「変わるはずがない」「手に負えない」ということで、社会的に葬られてきている人達なんですね。その人達が、私の目の前で、豊かな表情で生き生きと語っている。一般の人が描くイメージと現実とは全く違う。まず、そのことを伝えたかったんです。

そして、そういう彼らの心内を一生懸命聞いていくと、性的虐待にあったことがあるとか、家庭内外ですさまじい思いをしたことがあるということが見えてくる。そういう彼らの被害者としての一面も知らせたかったんです。と同時に、というところが大事なのですが、彼らは加害者でもあるわけです。被害者でもあり、加害者でもあり、という両面性に光をあてたかったんです。たとえば、映画のなかでも、自分はこの手で人を撃った、チェーンで人を殴った、この手で麻薬を精製したと、そういうことを語る

シーンがありますよね。先ほど森さんが『A』や『A2』を観て、テレビでは、ワル、人を殺したというふうに描かれているオウムの信者が、実は普通に笑ったり、和んだりしているということに、観客がすごく驚くっておっしゃったんですけど、たぶん私たちの多くがこういう場面を見ると、そういった感想を持ってしまうんだと思うんですね。それは直接ふれあったことがなかったり、見たことがなかったり、その人にどのような体験や過去があるのか知らなかったりと、被写体である「罪を犯した人」との間に距離があるからだと思う。それに加え、犯罪者は「変わりようのない、極悪人」というイメージを、テレビや雑誌などのマス・メディアが垂れ流して、私たちはそこから大きな影響を受けているし、メディアを批判的に見たり考えたりということを学んできていないから、森さんが指摘されたようなリアクションに対して、どこか致し方ないかな、とも思います。

私自身も、取材を通して、いろんなところで驚くわけです。笑ったり怒ったり、彼らがいろんな表情を見せること自体は、別におかしいとか特異だとは思いませんでしたよ。それよりむしろ、私自身がここに映っている人達に励まされたり、勇気をもらったりすることが多くて、そのことに驚いた。1995年に初めてアミティに取材に行った時のことは忘れません。すさまじい虐待の体験を語り合うシーンにいきなり、居合わせたんです。カメラマンがいますよね、そのカメラの後ろで私は参加者らの語りを聞いてるんですけど、本当にすさまじい内容なんですよ。その場にいてもたってもいられなくなるような話で。私はね、泣き出してしまったんです。けっこう私は取材で泣くんですよ。泣いちゃいけない、泣いちゃいけないと思っても、涙がツツツツツってこぼれてくることがあった。特にアミティを初めて取材した95年は、取り乱すぐらい泣いたんです。

あるとき、私が泣いていたら、被写体の男性がすうってやってきて、ティッシュを手渡してくれたんですよ。その人は強盗殺人を犯した人なんですね。彼は私達取材者のいる前で、すさ

まじい虐待の被害と同時に、自分のやったすさまじい加害体験についても語ってるわけですね。その彼が私のところに来て、大丈夫？ ‘Are you OK?’ って聞いてくれて、肩をとんとんとたたいて、ティッシュをさりげなく差し出してくれたんです。それにはね、ものすごくびっくりしましたよ。日本では考えられないでしょう？例えば刑務所に取材に行くことすら難しいし、たとえ取材できたとしても、受刑者と個人的に語りあったり、触れ合うなんて行為は許されないはずですよ。それに、彼らが取材者である私たちを気遣ったり、優しい言葉をかけてくるなんていうことも、考えられない。

それから、監督の私は女性ですが、カメラマンも録音マンも男なんです。私も新米の頃はカリカリしてましたので、すぐ喧嘩しちゃったりするんですね。でも喧嘩は当然日本語でやるじゃないですか。だからアメリカ人の彼らにはたぶん分からないだろうなと思って、実はいろいろ察していて、すごい気を遣ってくれる。後で「カメラマンにいじめられなかった？」と聞いてきてくれたりして、ものすごく優しくしてくれるんですよ。それはそれは、びっくりしましたね。

一般の社会でさえ、優しい言葉を私はあんまりかけられたことがないのに、アミティに行くと、いつも本当にみんなが優しく、あたたかく、私たち取材班までもこう、包み込んでくれるんですよ。そう意味ではかなり、驚きましたね。彼らの表情の豊かさ、感情の豊かさ。でも、たとえば彼らがアミティに参加する前の、十数年前はどうだったかというと、たぶん近づきたくもないような、コワイ人だったと思うんです。

この大学の文化人類学科では、フィールドワークという、教員が学生をフィールドに連れて行って調査をするという、そういうプログラムがあるんですけど、そこで去年アミティに20人ほど連れて行ったんです。ここにも何人か来ていると思うんですけど。その時に、この映画の一番最後に出ていた、ジミー・キラーと会えたんです。映画のなかより、ずっと柔和な表

情で、学生たちは皆驚いていました。

それにしても、すごい名前ですよ。ひとつ間違えたら、ジミー・キラー「ジミー・殺し屋」って名前になっちゃう。見かけも迫力があるので、取材の時も、カメラマンが怖がってました。カメラマンの南さんという人は、すごく背が低いんです。私と同じくらいなんですね。私、156なんですけど、彼、157か8ぐらいで、ほとんど変わらないんですよ。そのすごくちっこいカメラマンの彼が、ジミー・キラーをカメラのファインダーから覗くと、すごく怖いらしいんですね。ものすごい迫力があって。それで、実は鉄条網のドアが開く寸前のところで、「おおー、こえー」という南さんの声が入ってるんですよ。編集ではその音だけはめ変えて、ごまかしましたが、カメラマンとしてはそんなことしちゃいけない、もうNG、NG。撮影中に声を出すなんて、タブーをやっちゃってるんですね。彼はけっこう素直な人だから感情出しちゃったりはするんですけど、でも、カメラマンって、声が入ってしまうような、そういうリアクションをすることってあんまりないですよ。

森：『A』という作品を撮ってね、あれは最初、前半は僕が一人でカメラを回して。さっき言ったようにテレビから追われてしまったので、もうお金もないですからね、ENGっていう、普通の、要するにロケ・クルーですね、カメラマンがいて、ビデオエンジニアがいて、アシスタントがいて、という形が取れないので。ちょうどあの頃というのはデジタルビデオの民生機がやっと出始めた頃で、それがラッキーだったのだけど自分で回したんですね。途中から、やっと見つかったプロデューサーで、安岡卓治という人物が現れて、彼もカメラを回したんですけど。当時は富士宮にあった本部施設に行ったら、そこが要するに、スタジオになってまして、オウムのメディア戦略の一環なんでしょうけれど、非常にいっぱい機材とか、高価なアリフレックスとかミッチェルとか、そういったような16ミリ、35ミリはないけど、そ

ういったカメラがもうゴロゴロ転がっていて。

安岡はカメラおたくなんで、少しこう、何て言うのかな、それを見て動揺しちゃったんでしょうね。スタジオの中を撮りながら、いいシーンなんです。ところが、これ全部カットしました。理由は、安岡がずっと撮りながら、「ソ・ソ・ソ・ソ・ソ・ソーンシ」とかなんか口ずさんでるんですね、オウムの歌を（場内笑）。それで、撮影後に素材を見返しながら「なんだよ、これ」って怒ったんだけど、「いや、俺は歌ってない」って。現に入ってるのに（笑）。短いシーンなら、差し換えたりとかカットもできるんだけど、けっこう長く見せなきゃ意味のないシーンでね。カメラマンが「ソ・ソ・ソ・ソ・ソ・ソーンシ」って歌いながらオウムの施設を撮るのはまずいだろうってことで、そこはカットしましたが（場内笑）。まあ、よくあることではあります。

坂上：ありましたか？でもそれは珍しいです（笑）。そうやって口ずさんでしまうぐらい、自然な空気があったんだと思うんですよ。こっちはこっちでやっぱ、「おおー、こえー」って、声に出してしまうぐらい迫力があったんですよ。そう、それぐらい、この撮影のときも、彼にはまだ怖いと思わせるような、硬い部分があったんですね。それが今年の夏には、全然変わってたんです。またまた驚いたんですけど、全然表情が違うんですね。実は私、映画の完成後にも2回ぐらい訪れたんですね。そのたびに表情が変わっていく。撮影の3~4ヶ月後ぐらいに行ったときも、かなり変わってたんです。どんどん軟化してって、もう今や、誰か分からないんですよ。今回行った時私は、「ハイ」って挨拶しつつ、ジミーだって気が付かなかった。一瞬、「ええっ？ジミー？」って言ったんですけど。子どもとちょうど遊んでいたんですけど、本当にいいお父さんという感じだった。映画を撮った時点からもまたさらに飛躍的に表情が変わっている。そんなジミーを見ていると、「ああ、人間ってほんとに変わるんだ」と思う。

でも、彼とは15年前には会いたくなかったですね。というのは、彼はネオナチだったんですよ。その話もつい最近聞かせてくれたばかりです。私はジミーを、1998年ぐらいから知っているんですけど、本当にそういう、なんていうのかな、彼の生きてきた過程ってものすごいわけですよ。11才から薬物依存症ですよ、すごいでしょう。そういう意味ではもう、語りえないぐらい、いろんな体験をしている。会うたびに、いろんな話を断片的に聞かせてもらっています。たぶんライファーズの取材をしているときに、初めて彼がネオナチ系のギャングにいたって話を聞いたんです。彼が最初に起した暴行事件は、10才か11才の頃。当時、ベトナム人の難民家族が近所に暮らしていて、その子ども達に殴る蹴るの暴行をして、出て行け、みたいな感じで、ボコボコにやったと。それが、自分の記憶の中の、一番最初の、他人に対する暴力だったって言ってるんですけど。映画の中にもワンカットだけ使ってますけど、筋肉ムキムキの映像が出てきますよね。怖いですよ。だから私も、ここにいる人達は、アミティで自分のしてきたことに目を向け始める前に出会ってなくて良かったな、というのはあると思うんですよ。だからこそ、チャンスさえあれば、そういうプロセスさえ踏めれば、変われる可能性はある。

ただし、アミティのスタイルというのが、あらゆる問題やあらゆる文化に有効かどうか、それはわかりません。いわゆるペドファイルといわれる、小児性愛者などに有効なのかと言われた時に、有効だとは、言い切れませんよね。ひょっとしたら難しいかもしれないし、そういう人の特質にあったアレンジをする必要があるかもしれない。アメリカ以外の他の文化圏では、その文化のあり方に、またそのグループとかその対象者に対して、少しずつ対応を変えていかなきゃいけないのかもしれない。そういう必要はあると思うんです。だけどやっぱり、変わるプロセスさえ踏めていけば変わるんだな、ということを私自身は実感しているんです。臨床心理士の信田さんとは異なる、取材者

という立場ですけど、それでもやっぱりこの10年強の間に、強く実感してきたことです。

信田：DARC（ダルク）の方に話、聞きます？

坂上：そうですね。DARCというのは薬物依存の当事者の回復施設です。日本で30ヶ所を超える施設があるようなんですけど、京都にも確か2年前に出来たんですね。私のゼミでも講師として来ていただいたり、訪問させていただいたりして、お世話になってます。京都DARCから、加藤さんがいらっしゃってるので、よろしかったらご意見をお願いします。

加藤武士：京都DARCの代表をします、加藤です。僕は10年前、大阪DARCに入寮していました。まだ当時は、妄想と幻聴と、そういうものを持ちながら、まあ精神病院にいてもおかしくない、そういうふうな状態でDARCに入寮していました。施設に入った当時はやっぱり罪悪感と、生きづらさというか、もう希望のなさですね。そういうものを持ちながら入寮してて、どうなんのかなあ、という感じでしたね。でも行く場所もなかったんで、施設にいて、当時、10年後には自分が施設長になるとは思いませんでしたし、なろうとも思いませんでしたよ。でも、今日だけ、今日だけ、ということで施設にいて、プログラムを続けて、今あるんですが。そこそこ楽しみも持てるようになったし、希望もあります。今日もマクドナルドでハッピーセットを買って、子どもに、マクドナルドのお土産を持って帰るんですけど。そういうことができるようになりました。

この映画を観て、日本でも、刑務所でただ作業だけさせるのではなくて、やっぱりそういう更生のプログラムを、早くできるようになってほしいな、と。実際、僕も今は姫路少年刑務所に2ヶ月に1回行って、覚せい剤教育に参加してるんですけど。来年からは法務省も予算を付けるというふうになりました。こういうものがどんどん広がって、全ての人が良くなるわけではないんだけど、でもなんとかしたいと思っている

人が回復していける、もう一度やり直せる、DARCのような場所があれば、きっと良くなると。そういうことを信じて回復できる場と、そこで回復した人がいれば、僕は素晴らしいなと思っています。何度観ても、感動する映画でした。ありがとうございます。

坂上：すごいね、やっぱりこの映画をたくさんの人に見てもらいたい、メッセージを届けたいなって思います。もちろん、一般の人に理解してもらいたいというのはあるんですけど、私の中にはDARCの人達とか、似たような体験や問題を抱えている日本人達に、一番届けたいんですね。実は、各地で『ライファーズ』の試写会をやったときに、必ずDARCの人達に声をかけて、来てもらっていたんですね。東京で最初にやった時は、女性DARCという、女性だけの依存者のグループがあって、そこに声をかけたら、なんと20人ぐらいで大挙して来てくださって、上映の手伝いをしてくださったんです。試写会ではいろんなトラブルが発生したんですが、たとえばスクリーンがうまく下りてこなかったり、プロジェクターがうまく作動しなかったり、会場に100近い折たたみイスを広げなくちゃならなかったりと。そういう時、ダルクの人たちは進んで手を貸してくれました。

上映中は、彼女たちがどんな風に見てるのか、すごく気になったんですよ。日本で同じような体験をした人がどう観るのかなって、すごく不安だった。メディアや一般の反応よりも、当事者がどうこれを評価してくれるのかってことのほうが、実は気になってしまって。そしたら出たり入ったり出たり入ったりする女の子が何人かいるんですよ。「つまんなかったのかな。ああ、駄目だったんだ」って思って、上映が終わってから、「つまんなかった？」って聞いたんですよ。そしたら、「いや、そんなことないです。自分にはちょっとしんどすぎて、観れないんです。もうほんと、つらくなって、つらくなって、何回もトイレに行って、また戻ってきて。これは自分が考えなくちゃいけないことだって、すごく分かるんです。だけどつ

らいんです」っていうんですね。「あ、ちゃんと伝わったんだ」とホッとしました。

あと、男性のDARCの方もたくさん来ていただきました。新聞記者の人が「刑務所帰りの人が観に来てますね」っていうんですよ。「え、なんで分かったんですか?」って聞いたら、「そこでしゃべってますよ」って。普通、日本では服役体験のある人が、公の場でそんな話はしませんよね。ヤクザとかで、そのことを誇りにしている人以外は。むしろ服役体験を恥に感じ、友人であっても黙っている人が多いと思います。DARCの中にも服役体験者が何人かいて、その人たちが思わず興奮して、その会場の入り口で「俺の時はこうだった」っていうことを語ってしまうぐらい、彼らの心に触れたんだな、と。

アメリカではライフアーズは、刑務所でも上映されています。職員だけでなく受刑者対象にやってるんです。それがすごく、私は面白いと思っています。たとえばカリフォルニア州全体に、刑務所の中で、ケーブルチャンネルがあるんですよ。矯正局が運営するチャンネル・オブ・コレクションズ (Channel of Corrections) とかいうのがあって、そこで一斉放送したいという依頼をアミティが受けたそうです。それから、ライフアーズの完成直後にDVDのコピーをアミティに送ったのですが、まず真っ先に見せたのは、被写体となっているレイエスを初めとする、終身刑受刑者たちだったそうです。私は日本での映画上映が始まってから間もなくして、レイエス達を訪問したのですが、そしたらみんなほんとに、目を輝かせて、ありがとう、ありがとうって、言うんです。本当に自分たちが伝えたいことがここには出ているし、自分が知らなかった他の人達の側面がいろいろ出ているし、本当に心からありがとうって、みんなに言われたんですね。涙出ましたよ。

日本でも、刑務所内での上映を、いつか絶対実現させたいと思っています。ここに矯正関係の方も何人かいらっしゃるので、ぜひ刑務所内での受刑者向けの上映会を考えていただきたいのですがー。受刑者の人達が、どう希望を見出

し、どう変わっていけるのか。良い影響を、互いにどう与え合えるのか。もちろんそこには専門家による手助けも大きいんですけど、つまるところ、当事者である人達が、どう主体的に関わって変えていけるかということを、この社会でも念頭に置いてやっていくべきなんじゃないかと感じています。例えば、オウム真理教の問題だって、当事者によるアプローチがひょっとしたら効果的なんじゃないかと思うのですが。例えば脱会した人とか、信者であっても問題を感じていてどうにかしたいと考えているような人が鍵を握っているような気がします。私も実は一人、メールで知りあった信者の知りあいがいます。私が作った死刑に関するテレビ番組を観たり、私の講演会に来たりして、「番組観ました」とか「話聞きました」といったメールをくれるんです。彼はメールのなかで、実はオウムの事件を、自分たちの事件というふうに、重く、自分は受け止めているつもりだ、と言うんですね。どういうふうに被害者の人に謝罪というか、償いをしていったらいいのかと悩んでいる。でも、そう言いながらも、オウムはやめなと言っている。こういう人たちが、いろいろな人の存在や考えと出会うことによって、ひょっとしたら、何かが変わるのではないかと。森さんが取材を通して見た、オウムの中にいる人、もしくは脱退された方、そういうのをちょっとお話しただければ。

森：僕の映画を当事者であるオウムの信者が観て、もしくは元信者ですね、どんな反応だったかということ、細かくリサーチしてるわけじゃないんですけど、『A』と言う最初の作品を上映したときには、劇場に公開二日目ぐらいに、荒木さんと、あと10人ぐらい信者を連れて観に来たらしいですね。その時は、僕は会場にいなかったんですけど、メール、彼から来ましてね、手紙だ、当時は手紙ですよ、手紙が来まして。なんだっけな、帰り道は全員無口になりました。この映画たぶん、現世の人にとってもショッキングかもしれませんが、自分達にとってもショッキングでした。どうして自分たちは

こうやって現世ときちんと対応できないのか、調和できないのか、それをこれから考えます、と。そういったような文面の手紙をもらいましたけど。その思いはけっこう、みんなあったと思いますね。『A2』の時はみんな大笑いしていました。信者の一人が言ってましたね。大笑いしたけれど、これって自分たちなんだって、はっと気づきましたって。まあそれはともかく、さっきの続きになっちゃうんですけど、残ってる信者は事件には加担していないわけだから、善良で純粋で、ということは分かります。だから実際に事件に加担した凶悪な幹部信者たちとは別なんだって、たまに言われるんですよ。これはもうイマジネーションというか、世界への姿勢だと僕は思う。残っている信者たちが皆、あれほどに善良で純粋なのに、サリンを撒いた信者だけが凶悪だということがありうるだろうかと、普通は考えると思うんです。残念ながら映像としては提供できません。僕も撮れませんから、今拘置所に入っている人達は。でもね、一緒ですよ。今、拘置所に入ってる幹部信者も、『A』や『A2』の中で、普通にしゃべったり笑ったりしていた信者たちと、一緒です。これは自信を持って言えますけど。さらに言えば、麻原彰晃も善良さでは同じはずだと僕は思っています。

麻原について言えば、いくつか新聞なんかに書いたんですけど、去年ですね、もう。2月27日に彼の初公判を見に行ったら傍聴しまして、びっくりしました。どういう表現が適切かちょっと分からないんですけど、俗に言えば、壊れてます、彼はもう完全に。僕は傍聴席2列目かな、彼との間に、たぶん4メートルか5メートルですね。ずっと、同じ動作を反復してるんです。膝に手を置いてから、頭をちょっとかいて、それから耳に手をやって、それからにやっと笑う、と。メディアで「せせら笑い」って盛んにやってましたけれど、発作ですよ、あれは、ほとんど何の脈絡もないです。その動作を延々と繰り返してるんですよ。僕がショックだったのは、もちろん麻原が壊れてしまったこと、今まで精神鑑定、一度もやってないんです

よ、精神鑑定、彼については。普通こういう事件で、その首謀者である人間が法廷であれほどの異常な状態を示しているのに鑑定をしないということがどういうことか。ありえないですよ。今現在、彼がそういう状態になっても、いまだ裁判所は精神鑑定を実施していません。理由は分かりますよね。鑑定をした場合に、死刑にできなくなるかもしれない。それを裁判所は恐れているとしか考えられない。でももしそうならば、日本は法治国家の看板を外すべきです。裁判所だけではなくて、傍聴席にいる幾多のジャーナリストたち、あるいは新聞社やテレビ局の記者たちも、みんな見てるわけですよ。被告席に座る彼の異常な挙動を。ところが誰ひとりとして、この法廷に対しての異議を提示しなかった。何人かに話、聞きました。そうするとみんな、ああ、言われてみれば、うーん、なんかちょっとおかしいね、みたいな。ただまあ、それとこれとは別なんじゃないか、みたいな、よくわけのわからない、しどろもどろになっちゃうんですけど。僕ね、この曖昧さというか、しどろもどろさというのが、とても嫌で。

先ほど言いましたように、オウム以降、日本は大きく変わりました。例えば死刑、について、死刑制度を日本は存置してますけれど、オウム以降、たぶん20%か30%、死刑を肯定するパーセンテージが増えたんじゃないかな。その背景にあるのは明らかに厳罰主義ですね。悪を憎む気持ちが強まった。要するに善悪二元論の高揚の帰結です。自覚があればまだいいんですよ。自分なりのロジックを持って、今の世相を良しとするのであれば、あえて異を唱えるつもりはありません。ただね、あまりにも無自覚すぎるんですね。今のこの状況に対して。どんどん進んでいってしまっている。

先ほど信田さんがね、千葉県のこと僕に確認をされたのは、僕が千葉県在住だからなんです。千葉の我孫子市という所なんですけど、この我孫子市は、隣が柏ですね、野田市もあります。2000年に、例のオウム新法、団体規制法、これが成立する直前に、オウムの信者が、施設

を彼らは全部追い出されて、散り散りばらばらになって、けっこうこの我孫子市とか柏や野田に流れてきたんです。僕が今住んでいる家は、我孫子市役所のすぐそばなんですけれど、この我孫子市の市役所の玄関脇に大きな立て看板が設置されました。オウム信者（アレフ）の住民票は、当市は受理いたしません、という内容です。すぐ隣にあった図書館の玄関前にも、信者と発覚した場合には閲覧を拒否します、と掲示が貼りだされました。どうやって発覚するんだろうと思いますけど（笑）。それでね、市役所の正面玄関脇には、昔からもう1個看板がありました。フレーズはしっかり覚えています。「人権は、みながつもの、守るもの」（場内爆笑）、この看板があったんです。その看板の横に我孫子市は、オウム信者の住民票は受理しませんって看板を置いたんですね。

これが怖いんですよ。憲法を侵害する、人権を蹂躪する。これについては、仕方がない場合も、僕は実はね、本音で言えば、あるかな、とも思っています。僕は、がちがちの人権擁護論者でもないし、そもそも人権という言葉はあんまり好きじゃないです。人権という言葉だけに集約されてしまった瞬間に、また思考の停止が始まると思ってるので、あんまり人権って言葉は使いたくないんですけれど。でも少なくとも、この二つの看板が並存する思考の停止は怖いな、と。人権を蹂躪する、憲法を侵害することよりも、この矛盾に気付かない。市役所ですよ。毎日もう、市民も含めて、もちろん職員も含めて、みんなこれを目にしているわけですよ。視界に入ってます。人権はみんながつもの、と。同時に、オウムの信者の住民票は受理しないんだ、うん、と。何のわだかまりもなく、整合性を持って、一人の個人の中で、成立してるのであれば、こんなに怖いことはないですよ。僕はそれを、週刊朝日かなんかにちょっと書いたんですよ。どっちかの看板を外せ、と書きました。それがちょうど発売直後に、偶然かもしれないけれど、どっちかの看板が消えました。……どっちだと思います？ 人権の看板のほうが消えたんで

すよ（場内笑）。……確かに、どっちか外せと僕は書きました。でもね、こっちを外したかという感じです。複雑な思いがありましたけれど。

そうは言っても加害者というのは危険だし、絶対リスクというのはあるわけだし、だから社会のこの過剰な防衛もある程度は仕方がないとの考え方もちろんあるとは思いますが。もう管理社会、監視社会、厳罰社会でいいじゃないか、というロジックであれば、百歩もしくは千歩譲って文句は言いませんが、この看板の例が示すように、あまりにも刹那的で短絡的、オウムの信者に通底しますが、とにかく無邪気なんですよ、みんな。無邪気というか、少し考えが足りないというか。

去年出た本で『弟を殺した彼と、僕。』（ポプラ社刊）、原田正治さんという方が書いた本がありまして。どんな話かといいますと、要するに、原田さんという、書いた方の弟さんが長谷川さんという友人に殺されたんですね。保険金かなんかの事件だったと思います。弟を殺された原田さんは、当然ながらその長谷川さんを大変憎みます。その後に面会とか、手紙のやり取りを繰り返していくうちに、彼を死刑にすることでは、自分は何も癒されないんだと。だんだんそれに気付いていくんですね。原田さんはその後、死刑廃止運動を始めます。

印象的なエピソードがあります。原田さんがどこかの駅で、死刑廃止を訴えるチラシをまいているんですね、それを通行人が手にして、「お前ら遺族の気持ちになれ」と罵倒したようです。けっこうそういう人、いるらしいんですよ。で、原田さんが「私、遺族ですよ」と言うと、みんなばつが悪そうに走り去って行くという、そういった描写がありまして。とてもメタフォリックな場面です。遺族の気持ちなんていうのは、本当は誰も共有などできません。でも今は、今の日本は、これは拉致報道もそうなんだけど、その遺族の気持ちを、誰もが抱えているかのような気分ひたってるんですね。でもそこに発動しているのは、痛苦や悲嘆ではなくて、憎悪です、加害者に対しての。

よく僕はたとえに使うんですけど、交通事故というのがあるわけです。今も毎日20人死んでます。年間8千人強ですよ。大変な数字です。もし、自動車が発明された1世紀前にPL法があればと想像してください。とっても便利な商品です。ただし副作用があって、国内だけで一日20人、ヒトが死にます、と。普通こんなのは絶対商品化されませんよね。でも結局、モータリゼーションは世界中に広がりました。そしてその帰結として、今現在、日本国内だけでも、年間8千人死んでます。この8千人という数字は、当日に死んだ人の数の統計ですよ。次の日に死んだ人は入ってませんし、もちろん重軽症者も入ってません。その日に即死した人だけで、8千人。すさまじい数字です。考えてください、もし今日本にテロ集団が生まれて、一日20人、無辜の市民たちを人質として殺していくという状況になったらどうなるか。これは自衛隊どころか国連軍出動ですよ。空爆するでしょうね。でも、自動車に対しては、危機意識を誰も持ちません。その第一の理由は、自分もその恩恵に預かっているということと、もうひとつ、交通事故の場合は憎むべき加害者がいないからだと僕は考えます。

これが普通の事件であれば、憎むべき加害者がいれば、もうその憎悪は燃え上がりますよね。でも交通事故の場合は加害者がいないから、燃え上がらない。被害者は一緒ですよ。肉親を失った遺族の悲しみは同じです。でも殺人事件に対してはこれほどに遺族の気持ちを最優先するこの社会は、交通安全とか、そういった標語はあったとしても、自動車をこの世界からなくしたほうがいいんじゃないかと、誰も発想しません。とても冷淡です。これは本当にシンボリックなんだけど。いかに人を憎悪する、加害者を憎悪することで、僕たち自身が、自分たちの社会を蝕んでいるか、ということになると思うんですけど。あんまりちょっと、長い間、しゃべっちゃうと……

坂上：今の話も絡むんですけど、例えば、日本では、一日に自殺者が90人以上出ていますよ

ね。これ、すごい数ですよ。この社会では、人を殺すといった、他者に暴力のベクトルが向く行為よりも、自罰してしまう人のほうが、実はたくさんいるわけじゃないですか。

信田：そうですね、その話もですけど、そういう方向に坂上さんがいこうっていうのもわかるんですけど。先ほどの麻原の話なんですけど、多くの精神科医たちは、彼は統合失調か拘禁反応だろうと言っているのに、それがとり上げられないというのは、本当に彼を死刑にしたいんだと。一種のスケープゴートというのか、そういうふうに思います。森さんもお存知だと思うんですけど、触法精神病棟というのを、日本で作らなきゃいけなくなった。それは池田小学校の宅間の事件を受けて、ですね。実は私の住んでいる近くにも出来ているんですが、すごいんですよ。新築の病棟なんですけど、周りにお堀があるんです。江戸城が橋を落とせば攻められないように、それは要するに、逃げられないようにしてるわけですね。そこに入るひとたちは凶悪犯で、もうひとつの限定は、統合失調である、ということです。ひょっとするとね、たぶんそういうことはないと思うんですけど、もし彼の病が認定されて麻原彰晃が入れるとしたら、そこだと思うんですが。日本にいくつかできつつあるんですよ。佐賀のバスジャック事件の時に少年を外出させてしまった病院、東京の小平市にある病院などです。

私のかかわる領域では、先ほどマージナルと言いましたが、病気なのか犯罪なのか、ということが絶えず問題になってきました。例えば薬物依存でも、先ほど加藤さんが「僕は精神病院に入っていてもおかしくなかった」と仰ったように、じゃあ、精神病院が薬物依存症を治せるか、という問題があるわけですよ。アルコール依存症を治せるかといったら、答えはノーです。治せない。今のところ確かな効果を上げているのが、当事者のグループ、例えばDARCとかナルコティクス・アノニマス（Narcotics Anonymous、NA）とか、アルコールでいうと、アルコホーリクス・アノニマス（Alcoholics

Anonymous、AA)とか断酒会などですよ。今日も『ライフアーズ』の中で、ジミー・キラーが、刑務所の中に行った時に、仲間と分かち合ってくれよ、とか、それを君の仲間に分けてあげてください、とか言っていましたよね。彼は自分に対する感謝を、仲間と分かち合ってほしいというふうに、絶えず返していましたよね。ああいう当事者の力というんですか、自助グループの力というものを、『ライフアーズ』の中でとても坂上さんがよく描いてらっしゃる。そもそもアミティもそうですから。DVの加害者に対して、北米大陸でフェミニスト的アプローチをしているグループでは、彼らを「病気」と言わせない、というのがあるんですよ。DV加害者更生プログラムの用語の中から、「治療」、「治癒」、diseaseという言葉は一切、廃止するんですね。なぜかといえば加害者に「病気」という言い訳を与える、ということなんです。彼らは治癒の対象ではなく病気のせいで殴るんじゃないと。とにかく責任をとらせることを第一にするんですね。すごくヒステリックな感じもするけどそうしないといけない事情もあるんでしょう。この辺りの主張は麻原を病気と認めない司法の態度と共通していますね。

日本は司法と医療の相互乗り入れが生まれたといえます。触法精神病棟の誕生はその象徴です。刑務所の民営化が進めば、刑務所の中に治療モデルに基づくプログラムが展開されるようになるでしょう。実は、ブログにも書いたんですけど、私のひそかな楽しみというか希望は、年老いて、でもちょっとだけ頭がまだまともで、歩けるのであれば、刑務所の性犯罪者の収容房に行って、プログラムをやりたい。これが私の老後の夢、ちょっと変態の夢かな。

坂上：それはなぜですか？

信田：私はだいたい、いつも、グロテスクっていうんですか、すごい奇妙な人が好きなんです。だからこんな仕事やってるんです。だって変な人に会って、この世の果てみたいな、もうゴミみたいな話を聞いて、お金もらって生きて

るわけですから。だいたい私って変態なんだけど。中でも、性犯罪ですね。今日もいっぱい出てきましたが、なぜ、大人の男たちが、幼い子どもに性的虐待をするのかというのが、私はやっぱり、すごい謎っていうんですか、惹かれちゃうところがある。それをやりたいなって思ってるんですけど、森さんは関心あります、そういうのに。

森：いや、関心ありますよ。

信田：ありますよね。ドキュメンタリー作ってください。私が年老いて、性犯罪の加害者プログラムをやってる所を撮ってもらいたい、というような。いや、すみません。

森：ドキュメンタリーねえ、なかなか作りづらい世の中になってきて。

ちょっと坂上さんにお聞きしたいんですけど、これはよく質問されていると思うんですけど、やっぱりアメリカの場合はなんだかんだと言われながらも、これだけオープンに、こういった施設も含めて撮影させてくれてるし、それは本当に映像やっている人間としてはうらやましいというか、想像もつかないというか。僕は今、岡崎一明さんというオウムの幹部いますよね、坂本弁護士宅に襲撃した一人です。彼の面会に月1回ぐらい東京拘置所に行ってるんですよ。その東京拘置所、最近作り直していますけどね、でもハードはともかくソフト、つまりシステムが本当に前近代的ですよ。まずはとにかく、彼はまだ要するに裁判中ですから、未決拘留者というのかな。ところがいろんなことが制限されていて、新聞は朝日か読売で、テレビは観れない、ラジオだけが決められた時間帯だけOKで。面会の時間も30分まで。でもだいたい20分で終わってって言われるんですけどね。一日に一組までとかね。規則のために規則があるという感じで、何よりも、会ってそこで話したことは、外部では僕はしゃべっちゃいけない、と。その誓約書を書かされるんですよ。とにかくマスコミの人間の場合は、全部誓約書を書

かされて、一切これは外部で話しちゃいけません、と。たぶんその理由というのは、裁判に影響するから、ということなのかなあ、強いて言えば。でも裁判に影響するのは別に悪くないじゃないですか。いろんな角度から、裁判というものを考えるべきでね。こっちのやることに横槍入れるなっていう、そういったものをすごく感じてね。とにかく本当にもう、日本のこういった拘置所・刑務所のシステム、これはAmnesty（アムネスティ）もさんざん言ってますけれど、無茶苦茶遅れてるじゃないですか。こうした情報公開は、とてもじゃないけど、百年二百年たっても無理だと思うし、それをつくづく感じますし。さっきの麻原の件も、僕それは、朝日にちょっと書いたんですね。岡崎さんは非常に勉強熱心な人で、新聞よく読んでるんですよ。その後に僕が面会に行ったら、彼は、麻原はもう統合失調症だと、僕が書いたものを読んでいて、森さん、読んだよ、とガラス越しに言うわけです。「森さんね、麻原が壊れた理由は罪の意識に耐えかねてじゃないかって書いてるけど、それは違うよ」って彼は言うわけです。じゃあなんでって言ったら、「これだよ、薬だよ」って。拘置所の中で麻原、やられまくっちゃったから。効鬱か効躁か分からないけど、その薬を、ずっと大量投与、尋常じゃない量を、彼は投与されてまして。

信田：何か、それは薬物依存では……

森：で、壊れてしまった、と。当初は、絶食をしてるとか、そういったような情報があったみたいで、あれは要するに何とか薬を抜こうと、彼もがんばったんだけど、最後はもう崩壊しちゃったと、彼は言うんだけど、ガラス越しに。面会は、刑務官がいるんですね。全部こう、筆記してるんですよ、言ってることを。「岡崎さん、その話はともかくとして、これ記録されているけど、いいの？」って言ったら、「いや、こんなのみんな知ってるよ、ねえ」って言ったら、刑務官が笑いながら、「うん」って。まあ薬によって壊されたという憶測の信憑

性はともかくとして、本当に日本の拘置所・刑務所はなんとかしないとね。

坂上：それに答えたいんですけど、もう時間が来ちゃったので、最後にフロアから意見を聞きたいと思います。今出た話でも映画についてもいいので、意見や質問をお願いします。

質問者1：私はテレビを観なくなって25年以上で、新聞をとらなくなって10何年経つんですけども。そういう人間にとって、大阪に森さんの『A』と『A2』を観に行って、その映画館で坂上さんの『ライフアーズ』のチラシを見たいです。そして、昔心理学をかじってたもので、今日のシンポジウムは、私が行かなくて誰が行く、とか思って、すごく楽しみで、観てたんですけども。すごく妙な言い方だけど、視点がぶれてない映画で、しみじみ胸にしみたんですが。アミティの思想の背景というのは、キリスト教の影響が大きいんでしょうか。为什么呢？

坂上：アミティは宗教団体ではないし、特定の信仰はありません。参加者それぞれの宗教を尊重します。アミティの施設に行くと、参加者が集まれる集会場のような場所があって、そこには例えば仏像もあるしマリア像もあるし、いろんなアイコン（icon 聖画や聖図）やスタチュウ（statue 像）があります。AIDSで亡くなった家族の写真が置いてあったり、自分にとって大切な人の遺品など思い出の品が色んな所に置いてあるんですよ。だから、どんな宗教を信仰していても良くて、宗教を強制したりは絶対しません。実は創設者のうちの二人がユダヤ教なんですね。残り一人はクリスチャンですが、敬虔な信者というわけではなくて、ただ生まれ育った家庭がそうだったという感じなので、アミティという場自体に宗教的なバックボーンがあるわけではないんです。

ただ、映画にも出てきますけど、「アミティの祈り」アミティーズ・プレイヤー（Amity's prayer）というのがあって、それをみるとユダヤ

ーキリスト教的な影響というのは否めないところはありますね。それはアメリカという国自体が、キリスト教的なものを受け継いでいるとか、持っているからだと思うんですね。ただ繰り返しますが、アミティは宗教団体では決してありません。

質問者2: はじめまして、龍谷大学から来ました、学生のツツミといいます。今日は、本当に何か色々考えさせられる映画でした。それで、僕が一番印象に残ったシーンは、被害者の奥さんが、絶対許せない、絶対刑務所から出してほしくない、と言うところです。それはもう、一生腹の底から笑うことが出来ないんだろうな、とか思ったのと同時に、やっぱり自分に置き換えてみて、自分の家族なり恋人なりが、子どもが生まれたり子どもなりが殺された時、自分だったらまず、少なくとも刑務所から出してほしくないという気持ちがあります。それで、やはり自分が殺された場合でも、例えば自分の親なり妻なり子どもが、加害者を許してあげるって言っても、僕は殺された立場だとしたら、絶対にたぶん、許せないと思うんですね。その点、仮に皆さんのもっと身近な人が、こういう被害に遭った場合、その視点とか、どういうアプローチをお考えですか。

坂上: じゃあ、まず私から。先ほど森さんがおっしゃったことでもありますが、被害者になり代わることは、私たちには出来ないわけですよね。もうひとつ、先ほど原田正治さんという、被害者遺族で、しかも死刑に反対している方の話も出ましたが、彼には長い間、加害者を憎んでいる時期があったんですね。10年ぐらい毎日のように、彼の元には加害者から手紙が届くんですけど、封も開けずに、どこかに手紙をため込んでたそうなんです。最初はね、憎んで、許せない、というふうにならずに思っていた。今でも許せないとおっしゃっていますが、その憎み方というのが、全然、今と昔は違うということです。ある時期から気持ちが変わってくるわけですよね。だから被害者も、ある年月

の中で、いろんな出会いとか、癒やしのプロセスを経て、変わっていく。

でも私たちが、例えばテレビなどの放送媒体や新聞・雑誌などの活字媒体から情報を得る時は、ある人の人生の非常に限られた時点の、しかもある瞬間をとらえたものに過ぎないわけです。そうすると、被害者遺族が加害者を憎んでいる時期の、しかも裁判の判決が下った時などの、ある種の怒りの沸点のような、極端な瞬間だけが捉えられて、報道される。それを受け取った側は、やっぱりそのイメージで、「被害者は許せないって言ってるじゃないか」と思う。最近特に、死刑にしてくれと声高に叫んでいる、もしくは、しくしく泣きながら「許せないんです」と語る、そういうある種のステレオタイプな被害者のみが、映像、もしくは活字を通して、報じられる。あと、インターネットで流れている情報もマス・メディアからの受け売りが多いですね。

そういうメディア環境のなかで私たちは生きてきているから、イメージがすり込まれてしまうのは当然の結果だとは思いますが、でも現実とは違う。報じられている被害者だけが被害者ではないわけですよね。被害者は多様です。ライフアーズにも被害者遺族の声が登場しますが、私は彼女たちとは関係が結べなかったんです。レイエスの仮釈放委員会の日に初めてお会いして少し話をしたぐらいです。それまで被害者に直接連絡をとることが、私たちには許可されなかったんですね。弁護士を通じて依頼はしていたのですが、拒否されていたんです。それで撮影当日ようやく顔を合わせることができたので、取材依頼をしたのですが、遺族側の撮影はしてくれると言われてました。でも声は、英語圏でないところだったらOKだという許可まではもらいました。

実は審議会の決定が出るまでの休憩時間に、少しだけ被害者遺族と私たちは直接言葉を交わしているんです。というのは、レイエスに殺された被害者の息子さんも来てたんですけど、息子さんは沖縄に、軍隊のトレーニングで1年ぐらいいたことがあるという話をしてくれました。

彼は審議会では、自分が準備してきた文章でさえ、読み終えられないくらい泣いて取り乱していました。そこで与えられた時間というのは、例えば一人5分ぐらいなんですね。だからその中で被害者も文章を読み終えられなければ、話せなければ、それで終わってしまうんです。息子さんは、自分が書いた文章をたぶん半分も読めないで終わってるんです。小さな、十畳ぐらいしかない部屋で審議会を開くのですが、被害者による最後の証言の時は、部屋中が被害者の憎しみで、充満していました。「うーっ」て、首が締めつけられるような感覚です。そこにいる全員が、その緊張感や否定的な感情を身体じゅうで感じながら、被害者の語りや嗚咽を聞いているわけですね。

でも、休憩時間になった途端に、被害者遺族は笑顔で、といっても、まだ涙を浮かべていたようでしたが、私たち撮影スタッフのほうに寄って来て、「日本のどこから来たの?」という話をするわけです。例えば、この映像の中で使っているシーンは、そういう意味では、被害者遺族の、ある一時期のある瞬間にキャッチした、断片的な言葉でしかないわけです。彼らも、「一生出してほしくない」と語ってはいますが、これだけが本当にすべての望みなのかといったら、それは分からない。彼らの気持ちが変わっていく可能性だってあると思うんです。

実際今年は、被害者遺族が審議会に来なかったと聞いています。最近レイエスに会った時、「今年の仮釈放審議会はどうかだった?」って聞いたら「許可が下りそうだ」と。「どうして? 2年前の展開とずいぶん違うじゃない」って聞いたら、被害者が来なかったことが大きかったって言うんです。被害者が来るか来ないかで、審議会の決断も変わってくる。2年前は明らかに、委員会の人達は絶対出さないという、強固な態度だったんですけど、同じ委員が、2年後には出してもいいって言う。その大きな差はどこからくるか。私が思うにはやっぱり、審議会における被害者遺族の存在がすごく大きいんですよ。

そこには問題が二つあると思うんです。被害者遺族が変わりうる可能性というのを、私たち

は知らされていない、ということ。もうひとつは、被害者遺族の存在や語りが、仮釈放審議会の決断に、直結してしまうということ。例えば、同じ終身刑受刑者でも、ケルビンの場合は釈放されましたよね。彼の場合は、被害者遺族がいみじくも彼の釈放に同意してるわけですよ。日本では今、被害者の方たちが、自分たちの声を直接的に司法に影響させてくれというふうに言ってますが、それは実は非常に複雑な問題だと思っています。被害者にとっては、直接発言できることに意味がある、ということだと思うんですけど、でもそれが仮釈放の決断に直結してしまうというのは難しい問題だな、というふうにも思いますね。

森：たまに質問されます、もしあなたの家族が地下鉄サリン事件で死んでいたら、あなたはこの映画を作りましたか、と。

僕の答えは決まっていますね。もし僕の家族が地下鉄サリンで死んでいたら、僕はこの映画をつくりません、と。つくるところか、僕はたぶん個人的にオウムに復讐をします、麻原を殺します、と。そう言うのだいたい聞いた人はびっくりしますね。それは森さん、ダブル・スタンダードじゃないですか、と言うんだけど。当たり前ですよ、ダブル・スタンダードで。当事者なんですから。でも今、僕は第三者なんですね。当事者じゃないです。第三者の役割というのがありますし、それが僕は大事だと思ってますし。

被害者の気持ちをみんなが想像して、そのつらさを、苦しみを共有する。その気持ちは大事ですよ。それはもちろん大事なことです。でも先ほども言いましたように、その共有しようとする気持ちが、加害者への憎悪にあっさり転化してしまっていることの、構造的な怖さというか、そういったものが僕はあると思います。

去年、ポーランドのイェドバブネという村に行きました。ちっちゃな村なんですけど。ポーランドというのは要するに、第二次世界大戦、あるいはその前から、ドイツとロシアにはさまれて、二つの国から絶えず迫害と侵略を恒常的

に受けてきた国で、しかもユダヤ人が多かったんですね。ですから、ナチスによってもユダヤ人迫害、ホロコーストの被害が一番多かった国。だいたいアウシュビッツも、所在しているのはドイツじゃなくてポーランドですよ。言ってみれば被虐の国なんですね、ヨーロッパの中でも、世界史的にも。で、なぜそのイエドバブネに行ったかという、つい最近、この2年ぐらい前に分かったのかな、このイエドバブネというちっちゃな村、たぶん人口は1000人ぐらい、そのうちの300人ぐらいがユダヤ人なんですけれど、このユダヤ人が、1943年、戦争中に、納屋に全員が押し込められて、女子供も含めて、全員焼き殺されたんですね。戦後ずっと、ナチスの大量虐殺ということになっていたんですが、2年ぐらい前に、ナチスではなくてポーランド系の住民がやったんだ、ということがはっきり分かってきたんですね。ずっと今まで被害、被虐の国だった、もしくは被虐の民だったポーランドが、実はユダヤを迫害、殺戮していたことがはっきりしまして。けっこうポーランド国内でも大問題になって、調べてみたら、他にもいっぱいあるらしいんですよ、そういうところは。

被虐と加虐というのは連鎖するんですよ。あるいは反転するんです。加虐というものに第三者が憎悪をたぎらせることで、この連鎖というのがどんどん進みます。その結果が戦争になり、虐殺になる。ちょっと話がそれちゃいましたが、当事者が、被害者が、遺族が、犯人を、加害者を恨むのはこれ、当たり前です。誰もが恨みます。それは恨んで当然です。殺した相手を憎むと思います。ただ、同時に、その恨みというものを社会全体が共有すべきものでもないし、でも同時にそのつらさ、苦しさというものが、僕らは十分に感知すべきです。でも、共有しちゃいけない。絶対それは嘘です。

最近で言えば、香田証生さん。去年、彼、死にました。彼自身、あの武装組織が撮った映像の中で、遂に最後まで助けてくれと言いませんでした。親も言わなかった。彼が殺された後に、親はコメント出しましたよね、ご迷惑をお

かけしましたって。

・・・こんなグロテスクな社会がどこにありますか。なんで彼らが助けてくれと言えないのか。それは分かりますよね、助けてくれと言えればバッシングされるからです。同じ時期に北朝鮮の拉致被害について言えば、もちろん問題の早急な解決は大事なことです。しかしかたや拉致被害についてはこれほど燃え上がりながら、香田証生さんに対しては、この社会はとても冷淡でした。僕も含めて。あっという間に終わってしまった。僕はあれ、すごく反省してます。自分の中ですごく大きいですよ、香田さんのことは。絶対忘れちゃいけないと思うし、僕らが、僕が、彼を見殺しにしたんだと思っています。確かに直接手を下さなかったけれど、生きながら首を切断された彼については、僕も加害者の一人なんだと思っています。ちょっとまとまりなくなっちゃったけど、そんなことを考えてます。

信田：先ほども話していたんですが、『息子のまなざし』（監督・ジャン＝ピエール・ダルデンヌ、リュック・ダルデンヌ、2002年）という映画がありまして、それは息子を殺された父親が、息子を殺した少年と出会って、ずっとつきまとうという映画なんです。それを観て思ったのは、もし自分の親しい、自分の愛する人が殺された時に、もし私だったらどうするか、ということでした。ひとつは自分をとことん責めるでしょうね。もうひとつは、なぜじゃあこの人が殺されなきゃいけなかったのかということ、どうして加害者は自分の愛する人を殺したのかということ、をとことん、自分の中で説明しようとするでしょう。それができなければ、人はその事実には耐えられないと思います。恨んだり憎んだりだけでは、人は生きていけないと思う。ですから私は、なぜこういうグループが必要かということ、加害者がなぜ自分があのような犯罪をしたのかということ、彼らが、narrative（ナラティブ）というか、物語を構築してくれることによって、被害者もそれを聞いて、なるほど、こういうことでこの人は自分の、私の

家族を殺したんだな、というふうに被害者の物語を構築できる。被害者も、私はそこで救われると思う。

神戸の児童連続殺傷事件の被害者の遺族の山下さんという方が、非常に立派な文章を書いてらっしゃいました。もう一人の、淳君のお父さんは、徹底してその少年を否定し、もうとにかく社会に出すなと主張していらっしゃる。山下さんは少年の小さな善でも私は信じたいんです、というふうに仰っている。そして、自分がなぜあのような犯罪を犯したかということを、少年がずっと引き受けていくことそのものが、私にとっても必要だし、彼にとっても必要だというふうに仰っていた。

つまりなぜその加害者が加害者にならなければならなかったのかということを、被害者も共有せずには、被害者や残された者たちは耐えられないというふうに思いましたので。単純な憎しみと復讐だけでは、当事者としては、それだけでは不十分だというふうに思いました。

坂上：他はどうでしょう？

質問者3：話の本筋からはちょっとずれてしまうと思うんですけど、映画のなかで小さいまどまりが終わった後に、海の映像が入っていたと思うんですけども、あれは何か意味があるんですか。ひとつひとつが重たい話なので、切り替えて次のシーンを観られるようにとか、そういう配慮なのかなと思ったんですけど。なぜ海にしたのかなというのが、個人的な興味で。

坂上：いろいろ試行錯誤した末に、こういうつなぎ方にしたんです。ひとつは今指摘されたように、観ている人がそれぞれのシークエンスを咀嚼できるための工夫です。なんていうかな、映像やテーマを見る側が受け止める「間」を作った、ということです。その間を何にするかでいろいろ悩みました。撮影開始前、撮影スタッフで話し合ったんですね。これから私たちが取材するのは、ほとんどが刑務所などの無機質な四角い、コンクリートの閉鎖された世界の

中のことだと。とすれば、それと対極にある自然を、シークエンスの間に入れていくのはどうかと。撮影の南さんと録音の森さんとは、私のデビュー作から一緒にやってきた大切な仲間なんです。実際は私より、ずっと経験が長い大先輩で、すごく信頼しています。今まで私が手がけてきた映像は、実は3人でいろいろ練りながら撮ってきたものなのです。今回も相談して、撮影開始から3日目ぐらいに、空と海を撮ろうということにしたんです。いろんな所に撮りに行きましたよ。海も、いろんな時間帯に、いろんな海岸を探して行きました。そうして撮りたておいた海のカットを、それぞれのシークエンスが含んでいるテーマに合わせて、編集していったのです。

質問者4：京都文教大学3回生のカワムラです。先ほどから、私たちがメディアの影響を受けて、憎悪を覚えるというお話を森先生から伺っていたわけなんですけれども。起こった事件に対して、被害者の悲しみ、憎しみというものを聞いた際、私たちが抱く感情というものが、ただ加害者への憎悪に変わっていくということに対して、じゃあ私たちは怒りに我を忘れるだけではなくて、どのような対応というのがあるのか、ということに関して、何かありますか。

森：いろんな対処療法もあると思うんですけど。まずは、僕は、憎悪は別に否定するわけじゃないし、それは人間の感情ですからね。自分とは全く関係のない他人とはいえ、その他人が酷い目に遭っている、と。その加害者に対して憎悪する、と。それはそれで健全だとは思いますが。ただその憎悪の主体が、主語が、今どんどん複数名詞になっている。つまりこれ、拉致報道なんかを見れば実によく、これは明らかなんですけど、だいたいこの、「我々は」、とか、「国家は」、とか、「日本は」、とかね。組み立てられるレトリックの主語が、一人称ではないんですよ。その憎悪が。本来憎悪という、この感情は非常にnative（ネイティブ）なもので、一人称のはずなんですけど、そ

の一人称がどんどん複数名詞になる、もしくは曖昧名詞になってしまう、という時に、述語というのは、当然ながらどんどん暴走しちゃうわけですね。そうするともう、許さないぞ、とか、報復しろ、になってしまって、気が付いたらとんでもないことになっちゃってる、ということが、ひとつあると思うんですよ。

ですから、逆に言えば、しっかり一人称、ですよね。動詞を使うときには、一人称として主語を組み立てて、まあいちいちそんなことはできませんけど、なんとなくそういう気分で、これは本当に自分の感情なのかな、とか、そういう気持ちでどこかで持ち続けることとか。あとはやっぱり視点でしょうね。メディア、半分リテラシーなのかもしれないけれど、メディア・リテラシーって、そんなに僕は難しいことじゃなくて、要はいろんな新聞、いろんなテレビ、いろんな雑誌がありますけど、全部「視点」なんだということです。坂上さんの映画もそうです。これは彼女の視点です。僕の映画や本もそうです。実際の現実とは違います。断言します。実際のものなど再現できるはずがない。別に表現というジャンルだけの話じゃなくて、ニュースも同様です。その多様な視点の中から、自分で統合的に視点を培っていけばいいわけ。

よく『A』や『A2』を観た観客で、「やっと本当の事実を観ました。メディアは嘘ばかりついていますね」と感想を言う方がいるんです。誉めてもらってとても嬉しいけれど、でもその見方は正確じゃない。事実など僕は描いていません。そもそも描けません。マスメディアも嘘はついていません。全部視点なんです。まあしいて言えば、僕は自分にとっての、つまり一人称の真実を大事にします。でもマスメディアは、一人称の真実ではなくて三人称の客観を装った事実拘泥するところかな、横並びのね。だからとにかく、世界にはいろんな視点があり、メディアもその多様な視点の一つであり、その中から、自分もその視点をつくるんだというつもりでメディアに接したりとか、情報に接すれば、たぶん世界というのは違って見

えてきていると思うし、何よりも、人間というのはみんな、そんなに変わらないんだと。ちょっと今日、冒頭にも言いましたけど。みんな同じように、笑って泣いて、親がいて子どもがいて、と。もう世界中、昔からそれ、変わらないんですよ。そんな想像力が最低限、意識にあれば、少し世の中変わって見えるんじゃないかなあと思いますけど。

信田：自分の仕事に引きつけて言いますと、被害という、一番最初に頭に浮かぶのは、親からの被害を受けた子供、ということですね。そのひとたちは大きくなってから、親から虐待されたということで、親に憎悪を抱くんですね。私はその時に、森さんが仰るように、それは否定はしません。憎悪を抱くことを、私は肯定します。しかし、その後でやらなければいけないことは、なぜあの親があのように自分を虐待したのかということ、とことん研究し尽くしていただきたい、加害者研究をしていただきたい、ということを行います。憎悪というのは圧倒されているから憎悪なのです。加害者を研究したときにはじめて加害者を越えることが出来るかもしれない。そのために私は、例えば虐待であれば、やっぱり親についてちゃんと研究をしましょう、と伝えることにしています。研究というのは別にたいしたことじゃなくて、親の生育歴調べたり、親の人生のできごとを調べたり、丹羽文雄という作家がやりましたが、多くの文学作品はそういう、虐待する親を研究することで成り立っているところがありますので、そういう作業をされたらどうかと。憎悪そのものは、私は否定はしません。

坂上：最後に、私自身なぜこういうテーマに関心を持ったかということ、14才の時に受けたリンチ体験というのがあるんですね。それは本当に長い間、尾を引きました。いわゆる「不良」と呼ばれる15人ぐらいから、中学校の踊り場でリンチを受けたんですが、そこに連れていかれるまでには、何人もの生徒が目撃していましたし、リンチを見て見ぬふりをして通り過ぎてし

まった先生というのもあるし、リンチが終わった後に、私が助けを求めたにもかかわらず、「明日から学校に来なさい」としか言わない先生もいた。ということで、「見殺しにされた自分」というのが、私の原点なんです。

私自身は、日本の大学を出ていません。なぜかという、逃げたんです、海外に。逃げた理由はいっぱいありますが、そのひとつは、「見殺しにされた感」だったと思うんです。リンチの被害に遇った時に、何もしてくれなかった人たちに対して抱いた「何て冷たい人達なんだ」という怒り。それは、ある時期、この社会全体に対する憎しみにまで広がってしまった。そして、この国にさよならしたいっていう気持ちになっていったんですね。それで、高校卒業と同時にアメリカへ逃げた。その間、中南米を放浪したりもしました。逃げたからといって、全てが解決したわけではなかったけれど、でもやっぱり、世界にはいろんな見方や生き方があるということを、日本の外に出たことで、私なりに体験できた。そして再び日本に戻ってきて、こうして今もやり直ししてるわけです。でも、何かあると、いつもそこに戻ってしまう。私を見殺しにした日本社会、私をこんなに傷付けた社会、という気持ちは完全に消えてはいない。そして、さらにいうと、見て見ぬふりをするようになったり、弟をいじめたりという被害者から加害に転じてしまった自分というのもあるんですね。短い時間で語り尽くすことはできませんが、リンチの体験は、私を被害者に、そして加害者にしてしまったんです。

だから、被害・加害の連鎖というのは誰の中でもあることで、オウムの『A』なんか観ていても感じるのは、内なるオウムの存在です。自分がいるんですよ、そこに。オウムの信者の中にも自分を見るし、排除しようとする地域の中にも自分はある。自分はどっち側にもいる。被害にも加害にもどっちにも関わりうるんだ、という視点を持って考え続けることの大切さを感じます。森さんがよくおっしゃる、思考停止しないということ。あの映画の一番大きなメッセージは、「忘れるな」ということではないか

と思うんですね。それは「考え続けろ」ということ。確たる答があるわけではないけれど、「答を求め続けろ」ということ。そういうことを、静かに、しかし強く訴えかけている作品だと思うんですよね。

私の作品が扱っている対象やアプローチは、森さんの作品とはかなり異なります。私の場合は、海外の事例などを通して、問題の原因を示し、「解決方法や考え方としてこういうやり方もあるんじゃないか」ということを提案する。そういう意味では、変化球を投げているのかな、というふうに思います。それでもメッセージはある種、似ているところがあると思う。問題の原因やその解決策を考え続けてほしい、ということです。もう25分も過ぎてしまったので、そろそろ終わりにさせていただきたいと思っています。今日は本当に、ありがとうございました。

森：ありがとうございました。

信田：ありがとうございました。

司会：長時間、お付き合いくださいまして、ありがとうございました。それぞれ、会場にいた私達みんなの中に、今日の時間が忘れられないものとして記憶に残るのではないかと思います。シンポジストの信田さん、森さん、坂上さん、本当にありがとうございました。それではこれで、京都文教大学が主催させていただきました、上映会と講演会を終わらせていただきます。本当にありがとうございました。

(了)